

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 21 日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26780386

研究課題名(和文)抑制機能を媒介とした幼児の問題行動生起過程の検討

研究課題名(英文)Problem behavior process of young children mediated by inhibitory control

研究代表者

清水 寿代(Shimizu, Hisayo)

広島大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：90508326

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、幼児の社会性の発達に影響を及ぼす要因として感情理解と抑制機能を取りあげ、感情理解と抑制機能がかかわって問題行動が生じるというプロセスを検討した。その結果、感情理解を投入することにより、社会的スキルへの抑制制御の影響が有意に減少することが示されたものの、問題行動については、感情理解の媒介効果は認められなかった。次に、社会性の発達に影響する要因を探るために、3時点での縦断調査を実施したところ、5月から1月にかけての社会的スキルの発達及び問題行動の生起に影響を及ぼす要因として、5月での保育士との親密性が示された。幼児の社会性の発達には、保育士との関係性が重要であることが示された。

研究成果の概要(英文)：In this study, we examined the emotional understanding and inhibitory control as a factor influencing the development of sociality in young children, and examined the process of generating problem behavior involving emotional understanding and inhibitory control. As a result, it was shown that the influence of inhibitory control on social skills was significantly reduced by mediating emotional understanding, but no effect of mediating emotional understanding on problem behavior was observed. Next, in order to investigate factors affecting the development of sociality, three longitudinal investigations were conducted. As a result, intimacy with nursing teacher was shown as a factor influencing the development of social skills and occurrence of problem behaviors from May to January. It was shown that the relationship with the nursery teacher is important for the development of the sociality of young children.

研究分野：発達臨床心理学

キーワード：社会的スキル 問題行動 感情理解 抑制機能 教師-子ども関係 幼児 縦断研究

1. 研究開始当初の背景

多動・不注意，攻撃・妨害行動などの問題行動を示す幼児は，自己の感情の理解がうまくできないために，他者の表情や置かれた状況から感情を予測することが難しく，時に仲間を巻き込んだ重篤な問題行動を示すことが指摘されている。このことから幼児の感情認知の発達を促す介入として，表情と感情を一致させたり，状況から感情を予測させたりする介入が行われてきたが，問題行動の低減効果に関しては，一貫した結果は得られていない (Bierman, et al., 2008)。

近年，海外においては，ADHD 幼児は，自他の感情認知に関する知識はもっているものの，実際の場面になると自己の感情や行動を抑制することができないという抑制機能の不全が指摘されるようになり (Brocki, et al., 2009)，幼児の抑制機能と攻撃行動の関連を検討した研究 (Raaijmakers, et al., 2008)，幼児の抑制機能と社会的スキル及び問題行動 (外面化行動・内面化行動) との関連を検討した研究 (Rhoades, et al., 2009) が行われている。一方，幼児の感情認知については，幼児期の感情認知と注意の問題が小学校入学時の学業成績に及ぼす影響を検討した研究 (Rhoades, et al., 2011)，幼児の感情認知と攻撃行動の関連を検討した研究 (Denham, et al., 2002) が行われているものの，いずれの研究も相関関係を検討したものである。したがって，感情認知と問題行動を媒介する変数として抑制機能を想定し，因果モデルを明らかにするような実証研究は行われていない。

申請者は探索的な研究として，4，5 歳児 47 名を対象に，子どもには感情認知課題及び抑制機能課題を，教師には子どもの問題行動に関する評価を実施した。その結果，感情認知に関する知識が高く，抑制機能の低い幼児が 13 名おり，これらの幼児の多動・不注意，攻撃・妨害行動得点が高いことが明らかにさ

れた。このことから，感情認知の知識は持っ
ていても抑制機能が低いと問題行動を示す
可能性が示唆された。しかしながら，感情認
知と抑制機能との関連や問題行動に至るブ
ロセスについては検討されていない。問題行
動の生起プロセスが明らかにされること
により，新たな介入プログラムの開発が期待
される。

2. 研究の目的

本研究では，感情認知と問題行動を媒介す
る変数として抑制機能を取りあげ，感情認知
と抑制機能がかかわって問題行動が生じる
というプロセスを明らかにすることが目的
である。

3. 研究の方法

(1) 感情認知及び問題行動と抑制機能の関連

幼児の抑制機能と問題行動の関連を検討
した研究では抑制機能と問題行動の関連が
認められた研究 (Raaijmakers, et al., 2008)
や内面化行動にのみ関連が認められる研究
(Rhoades, et al., 2009)，抑制機能と問題行
動との関連は認められない研究など，一貫
した結果は得られていない。一方，幼児の感情
認知と攻撃行動の関連を見出した研究は，
Denham, et al. (2002) の研究のみである。
さらに，幼児の感情認知と抑制機能及び問題
行動との関連を検討した研究はほとんどな
い。そのため，基礎的な研究として，感情認
知及び問題行動と抑制機能の下位尺度ごと
の関連を詳細に分析・検討する。

方法

調査尺度として，幼児用問題行動尺度 (外
在化問題行動 8 項目，内在化問題行動 5 項目，
金山ら，2006) を使用する。また，抑制機能
課題として，抑制制御課題「昼夜ストループ
課題 (小川，2008)」を使用し，感情認知課題と
して感情のラベリング課題，感情の表出

課題，感情の予測課題（Denham, 1986）を，言語発達課題として絵画語い発達検査（PVT-R, 上野ら, 2008）を使用する。そして，感情認知及び問題行動と抑制機能の関連を検討する。

（2）抑制機能と問題行動を媒介する感情理解の検討

感情理解は，抑制機能と問題行動を媒介する可能性が示唆されたため，抑制機能，感情理解及び問題行動を含む，社会性の発達について詳細に検討する。具体的には，感情理解を抑制機能と問題行動及び社会性の発達を媒介する要因として捉え，これらの関連が成立するかについて媒介分析を用いて検討した。さらに，1回目の調査から3か月後に実施した2回目の調査について，1回目の抑制機能，感情理解，問題行動及び社会性の発達が，2回目の各変数とどのように関連しているかを検討する。

方法

1回目の調査から3か月後に再度調査を実施する。調査内容は，1回目と同様である。抑制機能と社会的スキル及び問題行動を媒介する要因として感情理解を投入した媒介分析を行う。

（3）社会性の発達に影響する要因

社会性の発達に影響する要因を探るために，3時点での縦断調査を実施する。具体的には，1回目の調査は5月（新学期開始時点），1回目の調査から3か月後の8月，2回目の調査から3か月後の1月に実施する。調査内容は，それぞれの時点での社会的スキル，問題行動，抑制機能，感情理解，教師 - 子ども関係（親密性，葛藤）である。社会性の発達の変化に影響を及ぼす要因を検討する。

方法

2回目の調査から3か月後に3回目の調査を実施する。調査内容は，2回目と同様である。社会性の発達の变化について潜在曲線モデルによる分析を実施する。検討するモデルは，5月（新学期開始時点）から1月にかけての社会的スキル及び問題行動の変化のパターンが，新学期開始時点の5月の各要因の状態によって異なるかを分析するモデルである。

4．研究成果

本研究では，1つ目の目的として，感情認知及び問題行動と抑制機能の関連を検討した。感情理解及び問題行動と抑制機能の相関関係を検討した結果，感情理解と問題行動の下位尺度である不注意と引っ込み思案との間に負の弱い相関（それぞれ $r=-.19$, $r=-.22$ ）が見られ，感情理解と抑制機能に正の弱い相関（ $r=.28$ ）が見られた。一方，抑制機能と問題行動の下位尺度である攻撃性，不注意，引っ込み思案にはいずれも関連が認められなかった。この結果は，抑制機能と問題機能との関連が認められないとする岡村（2012）の研究と一致するものであり縦断的な調査を実施し，更なる検討が必要とされた。

そのため，2つ目の目的として，1回目の調査から3か月後に再度調査を実施し，抑制機能と社会的スキル及び問題行動を媒介する要因として感情理解を投入した媒介分析を実施し，1回目の抑制機能，感情理解，問題行動及び社会性の発達が，2回目の各変数とどのように関連しているかを検討した。

その結果，抑制制御と社会性の発達については，感情理解を投入することにより，社会的スキルへの抑制制御の影響が有意に減少することが示された。一方，抑制制御と問題行動については，感情理解の媒介効果は認められなかった。従って，抑制制御と感情理解

は社会性のポジティブな側面の発達に寄与するが、問題行動のようなネガティブな側面の生起プロセスには、影響しない可能性が示唆された。

また、5月時点での抑制機能が、3か月後の自己コントロールと正の相関があること ($r=.25$)、5月時点での感情理解が、3か月後の自己主張スキル、協調スキルと正の相関があること (それぞれ、 $r=.27$, $r=.21$) が示された。今後、3時点での縦断調査を実施し、5月時点からの発達の伸びに、どのような要因が影響しているのかについても検討が必要とされた。

そのため、3つ目の目的として、社会性の発達に影響する要因を探るために、3時点での縦断調査を実施し、5月(新学期開始時点)から1月にかけての社会的スキル及び問題行動の変化のパターンが、新学期開始時点の5月の各要因の状態によって異なるかを分析した。

その結果、5月(新学期開始時点)から1月にかけての社会的スキルの発達に影響を及ぼす要因として、5月(新学期開始時点)での保育士との親密性が示された。これは、保育士が子どもに対して親密性を示すほど、子どもの社会的スキルの発達が進まなくなるということを示していた。学年の最初に保育士から信頼される幼児は、ソーシャルスキルが高いことが予測され、5月(新学期開始時点)から1月にかけて高いスキルレベルを維持するために増加が見られない可能性が示唆された。同様に、問題行動の変化に影響を及ぼす要因として、5月(新学期開始時点)の保育士との親密性が示された。これは、保育士の子どもに対する親密性が高くなるほど、子どもの問題行動が低減するということを示していた。

この結果から、幼児の社会性の発達には、幼児の認知的側面よりも保育士との関係性が大きな影響を及ぼすことが明らかにされ

た。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計5件)

永野 美咲・清水 寿代, 幼児の自己調整機能・実行機能が社会的スキルに及ぼす影響, 幼年教育研究年報, 査読無, 38巻, 2016, 43-50.

藤岡 真紀・清水 寿代, 乳幼児をもつ母親の被援助志向性に影響を与える要因の検討, 幼年教育研究年報, 査読無, 38巻, 2016, 51-58.

福島 久美子・清水 寿代, 大学生の自己・他者受容と発達障害に関する知識が発達障害者に対する態度に与える影響, 幼年教育研究年報, 査読無, 38巻, 2016, 35-42.

清水寿代・鄭曉林・浦上萌・上山瑠津子・三宅英典・永野美咲・藤岡真紀・清水健司・杉村伸一郎, 幼児の感情理解と社会性の関連, 幼年教育研究年報, 査読無, 37巻, 2015, 75-84.

清水寿代・鄭 曉琳・浦上 萌・杉村伸一郎, 大学生を対象とした親性準備性尺度の作成: 自尊心, 自己嫌悪感, 本来感との関連, 幼年教育研究年報, 査読無, 36巻, 2014, 5-12.

[学会発表](計6件)

Shimizu, H. & Shimizu, K., Preschooler's Emotional Knowledge as a Mediator Between Inhibitory Control and Social Competence: Longitudinal Research, The 2017 Hawaii International Conference on Education, 2017年1月3日, Honolulu, Hawaii
Shimizu, H. & Shimizu, K., The role of the student-teacher relationship on the development of social competence in preschool children., The 31st International Congress of Psychology,

2016年7月26日, Yokohama, Japan
清水寿代・清水健司, 幼児の抑制制御と
社会性の関連 - 感情理解の媒介的役割 - ,
日本心理学会第79回大会, 2015年9月
23日, 愛知
清水寿代, 母親のストレス低減に有効な
ソーシャルサポートの在り方, 日本保育
学会第68回大会, 2015年5月9日, 愛
知
清水寿代・清水健司, 親性準備性の発達
に影響を及ぼす要因の検討, 日本教育心
理学会第56回大会, 2014年11月8日,
兵庫
永野美咲・清水寿代, 幼児の自己調整機
能, 実行機能と社会的スキルとの関連の
検討, 日本心理学会第78回大会, 2014
年9月11日, 京都

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清水 寿代 (SHIMIZU HISAYO)
広島大学・教育学研究科・准教授
研究者番号: 90508326